



Subaru

男声合唱団 ニュース No515 '15. 8. 3

第2次世界大戦終結70周年記念特別企画

## 極東シベリアから旧「満州」合唱交流の旅 2015年1月16日～1月25日 (その2)

スケジュールと訪問都市・主な出来事

5日目：7月20日（月）ウラジオストークからハルビンへ（バスの旅）  
ロシア出国与中国再入国



朝出発するバスを待つ「昴」の好男子の面々



ロシア出国管理局前での審査の順番待ち(気温30度近くの外で)

今日は長いバスでの移動日となりました。各自重いトランクを持ち、ロシア国境出国時のロシア管理局での2時間待ちと出国審査、特に中国綏芬河(スイフンガ)での入国管理局での2時間の入国審査（2階に入国審査場所があり、50段の階段を各自が重いトランクを階段1段づつ持ち上げて、またそれを下して・・2時間の待ち時間に2階の待合室に座る場所がなくて、みんな立ちづくめ・・中国の行政面の”官僚主義”を目の当たりにしました。



国境の町・綏芬河（ロシアとの貿易が盛ん）道路沿いの建物



綏芬河のレストランで遅い昼食：昼食も中華料理のフルコース！

無事中国に再入国し、高速バスにて、ハルビンまでの550kmを約6時間で横断走行するバス旅となりました。（7時にウラジオストークを出発し、夕方6時にハルビンに到着する11時間のバス旅となりました。）（時差あり）

No515(1/5)

戦後70年を経た今、ここは当時とどれだけ変わったのだろうか？バスの車窓から見える景色は一面の青々と育つトウモロコシ畑、そして大豆と小麦を育てている農業地帯。米はあまり植えていない模様。冬が早く、雪が積もる地域だけに作物を作る期間は短く、収穫だけでは生活ができないため、農閑期は都会へ出稼ぎに行くとのこと。経済成長を続ける中国で、貧富の格差の広がりが言われている中でこの東北部の農村で暮らす人々の生活もなかなか厳しいように思われます。



トウモロコシ畑が延々と続く元「満蒙開拓団」入植地



黒竜江省第3の都市「牡丹江」の市内ビル群が突然現れる。

この綏芬河(スイフンガ)から牡丹江(ボタンコウ)を経てハルビンの領域は、戦前のいわゆる「満蒙開拓団」の入植地。「牡丹江」にはソ連に近い国境の駐屯地として、関東軍司令部が置かれ、また満州鉄道（「満鉄」）の支社が置かれた重要な町。この国境地帯は山に囲まれた大きな盆地になっており、畑があり、多くの日本人が入植。家族を含めた一般開拓団民と共に14歳から16歳の「青少年義勇隊開拓団」が政府の鳴り物入りの移民政策として進められました。”右手に銃を、左手に鍬を“と農業に従事しながら国境を守る関東軍の予備軍としての役割を担わさせられることになったのです。今回の旅の団長としてメンバーの引率者の役割を引き受けていただいた藤後さんも、この少年義勇隊の隊員として入植し、敗戦前後の生死をかけた苦しくも痛ましい数々の経験をされ、敗戦後10年を経て帰還されたのです。（満蒙開拓団の悲惨な事実は敗戦時の満州の日本人総数155万人中満蒙開拓団27万人、そのうち死者総数17万6千人中開拓団員7万8500人が死亡。日本人総数の15%に対して死者総数の50%が開拓団民！であることからもその一端が浮き上がります。）

この間の詳細な歴史的事実の記録は「[昂](#)」ホームページの「[藤後通信へのリンク](#)」に「[第2次世界大戦終結70周年特別企画 憲東シベリアから旧「満州」合唱の旅 ハルビン・ハバロフスク・ウラジオストクトーク<資料集>「歴史ガイド」](#)」が掲載されています。当時の開拓団と共に敗戦時のこの地域の状況が手に取るようにわかる貴重な資料といえましょう。是非ご一読ください。

6日目：7月21日(火) ハルビンでの現地合唱団「悦城合唱団」との合唱交流コンサートと  
大きいに盛り上がった交流ティーパーティ  
悦城合唱団代表との懇親さよなら夕食会で、両国の不再戦・友好と平和促進のための一層  
の合唱交流を誓い合う。

#### ・“**プラボー！**” 声の良く出る日本の合唱団に成長！

中国との合唱交流は今回の企画では初めての交流となりましたが、これまで3度ロシアの合唱団と交流した曲「アムール河の波」「ロシア民謡メドレー」「紫金草物語より」を全員がしっかりと声を出し、まとまった曲として歌うことができました。大きな拍手と共に会場からは”**プラボー！**” “**アンコール！**” の声が飛び、それに応えて「花は咲く」を歌いました。



わが日本の40名の混声「ロシア中国音楽交流の旅合唱団  
藤後団長の挨拶

私たちは戦後70年の節目に「極東シベリアから旧「満州」合唱交流の旅」を企画し、日本から50名の団員と共に、皆さんとの合唱交流のためにやってまいりました。

私はかつての満州国でこの近くの場所で、あの忌まわしい関東軍の一人として、満蒙開拓青少年義勇軍を指導してきました。多感な15歳の少年でした。

私にとってここは第2の故郷です。この町は私にとって忘れられない町です。



貴国の抗日戦争勝利のあと、私はそれまでの人生を大きく変える新中国建設という事業で八路軍の衛生兵として参軍するという日本人として稀有な経験をします。(以下、中国語通訳・拍手!)

あなた方は私の子供たちです。そしてその中で多くのことを学びました。1955年帰国後、日中不再戦を願い、眞の日中友好と国政の革新をめざす民主運動に参加し現在に至っています(拍手!)

現在、日本の政権は世界の宝・平和憲法を改悪し、日本が再び戦争する国へ突き進もうとする危険な情勢の中で、私たちは二度と戦争の悲劇を繰り返さないという気持ちを強くしています。それぞれが各分野で力を出し合って、平和と民主主義を守る運動に参加しています。(拍手!)

今日私たちが歌う曲は、一つはロシアのうた(ロシア民謡)、2つ目は南京虐殺をテーマにした「紫金草物語」お手元の説明書をご覧ください。2つの大きなテーマを持った歌を披露します。今回の旅で、双方の合唱団が平和の歌を交し合い、平和と友好の促進に努めたいと思います(拍手!)

**若々しい”悦城合唱団“が素晴らしい混声合唱を披露する!**



40名の混声・悦城合唱団のステージ



「アムール河の波」「ロシア民謡メドレー」「紫金草物語より」熱唱



「モスクワ郊外のタベ」「アムール河の波」中国の歌を歌う!

女声18名、男声21名の混声合唱団。将来音楽関係のプロや先生をめざす大学生を中心の合唱団。指揮者(男性)や音楽監督(プロデューサー)(女性)は大学(音楽系)の教授。

「モスクワ郊外の夕べ」「アムール河の波」(ロシア語で) 中国のうた数曲(4部合唱で)を熱唱! 中国の歌では男女の若々しい踊りも披露!

若者ののびやかな声、ひたむきさが感じられる声、男声も女声も良く響く美しいハーモニー! しっかり練習している、鍛えられていることが歌に出てる。特にロシア語で歌った「アムール河の波」はロシアの合唱団も顔負けの素晴らしい歌声! 絶賛の“プラボー”があちこちから聞こえる出来栄えでした。



若々しい情熱と未来を生きる明るい表情!



若さに乾杯!

### 悦城合唱団代表(音楽監督)の挨拶

「日本の合唱団と私たちの合唱団が交流出来ることを光栄に思います。“(日本語で)ようこそいらっしゃいました!”(拍手)。設立して2年の若い合唱団。団員メンバーはほとんどが大学生(音楽を専攻)。私たちは経験は不足しているが情熱は人に負けないものがある。皆さん大先輩に学びたい。私たちはあなたたちの団長さんの孫です。このような交流は私たちにとって非常に役に立つ大事なことです。皆さんが重ねられてこられた貴重な経験、そして平和友好の経験を教えていただき、私たちが学んでこれからの中日友好の事業に頑張っていきたい」とエールを送っていました。

### 交流パーティの一場面

両国の指揮者が同じ舞台に立ち、合同の合唱に指揮を振る!



本並先生の指揮で会場の皆さんとの合唱が始まる



悦城合唱団の男声合唱・張りとよく響く美声の持ち主たち!

交流パーティでは、合唱団員以外に多くの中国人関係者が集まられ、パーティ会場は200人ほどの人で明るい雰囲気の交流となりました。特筆すべきは、本並先生が中国の合唱団員に「平和の花紫金草」(中国語版)の楽譜で合唱指導し(日本の合唱団員合同で)、悦城合唱団の指揮者が日本と中国の合唱団員全員に「海よ、故郷(大海 阿、故郷)」(中国語版)の楽譜で合唱指導したことです。両国の合唱交流の場は両国の団員が入りまじり、二人の指揮者が同じ舞台で指揮をするという友好の場となり、会場は大いに盛り上がりました。



本並先生が悦城合唱団員へ「紫金草の花」を中国語で合唱指導

悦城合唱団指揮者が「大海 阿、故郷」を中国語で指導



## 7日目：7月22日(火)～10日目：7月25日(金)

7日間コースの帰国組(11名)は先に22日にハルビン空港より仁川空港経由で関空・成田へ

10日間コースのメンバーは、残りの3日間をかけて、ハルビンより瀋陽→撫順→大連→旅順を巡り、  
25日(金)仁川空港経由にて無事帰国しました。

### (後記)

今回の旅行に夫婦で参加しました。当初身体の弱い夫の「付添役」であった妻も合唱団の一員として参加させていただき、喜びとともに大きな収穫（感動）があったようです。

今回の旅行團には全国から多くの方々が参加されました。その方々と一緒に旅ができ、旅をとおして交流できたこと、またこの旅がなければ個人としては行かなかつたであろうシベリアと中国東北部（旧満州）の都市を訪問し、重い歴史の現実を目の当たりにするとともに、現地の方々の暖かな歓迎を受け交流できたことを感動を持って受けとめております。

ありがとうございました。（編集子：広報部・吉川勝彦）

No515(5/5)